地域社会における子育て支援の拠点としての児童館の活動効果に関する研究

八重樫（ヤエガシ） 牧子（マキコ）＊1　小河（オガワ） 孝則（タカノリ）＊2　田口（タグチ） 豊郁（トヨヒロ）＊2

目的　地域における児童館の子育て支援の課題を探るために，３市の児童館の子育て支援活動の実態とその活動効果を明らかにし，児童館活動効果に影響を与える要因を検討した。

方法　３市の児童館の子育て支援活動に参加している保護者（母親）を対象に自記式調査用紙を配布し，留置き調査を行った。回収数733，回収率54.9%，有効回答数627，有効回答率85.5%であった。調査内容は，対象者の属性，子育て状況，子育て観，子育て不安やストレス，児童館利用状況，児童館活動効果に関する95項目であった。分析方法については，子育て不安と児童館活動効果に関するカテゴリカル因子分析（プロマックス回転）と段階反応モデルによる各因子の母数値の推定，属性，子育て状況，児童館利用状況と地域のクロス集計とχ^2検定，子育て不安得点・ストレス得点・児童館活動効果得点と属性・子育てサポート・子育て観・児童館利用状況との一元配置分散分析，子育て不安・ストレス得点と児童館活動効果得点相関係数の算出，子育て不安得点・児童館活動効果得点を従属変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。

結果　項目反応理論を用いた項目母数の検討を行った結果，子育て不安の４項目とストレス項目の１項目を除くことになった。地域差については，Ｃ市に比べＢ市の子育て状況や児童館利用状況が良好とはいえず，子育て不安得点も高く，児童館活動効果得点も低かった。母親の子育て不安を軽減するために，児童館の子育て支援活動が何らかの影響を与えていることが推察された。児童館での仲間や職員が児童館活動効果に影響を与えていることが明らかになった。

結論　地域の実情にあった児童館の子育て支援活動を展開していくためには，子育て支援の実践評価尺度の作成，子育て支援活動（プログラム）を創りだすための実践モデルの開発，ソーシャルワーカーとしての児童館職員の役割の重要性が示唆された。

キーワード　児童館，子育て支援，子育て不安，児童館活動効果，項目反応理論

Ⅰ　は　じ　め　に

都市化，核家族化，少子化そして共働き家庭の一般化により，子どもを取り巻く家庭や地域社会が大きく変化した。かつては子どもを育み，守ってきた家庭・地域社会の子育て機能や教育力が，低下している。その結果，子どもや親子関係に関する問題，たとえば子どもの犯罪，いじめや不登校，ひきこもりそして児童虐待などが深刻な社会問題となっている。このような子どもや家庭の問題を解決するために，子どもの育ち，親の育ち，子育てに対する社会的支援の必要性が増大している。

2003年に児童福祉法が改正され，従来の放課後児童健全育成事業を含め市町村が実施する子育て支援事業が児童福祉法に規定された。また，「次世代育成支援対策推進法」が施行され，厚生労働省から「行動計画策定指針」が発表された。2005年４月からは一般企業も含め，都道府県・市町村の行動計画のもとに総合的・計画的

＊１川崎医療福祉大学准教授　＊２同教授

な子育て支援対策が進められている。この「行動計画策定指針」には，健全育成の拠点の１つである児童館の役割が取り上げられている。児童館については，「健全育成の拠点施設の１つである児童館が子育て家庭が気軽に利用できる自由な交流の場として，絵本の読み聞かせや食事セミナーの開催等，親子のふれあいの機会を計画的に提供するとともに，地域における中学生・高校生の活動拠点として，その積極的な受入れと活動の展開を図ることが必要である」と指摘されている。地域福祉計画を策定するに当たっては，新しい施設や事業を創設・拡充するだけではなく，これまで地域の中で蓄積されてきた社会福祉資源をどのように活用していくことできるかということが，新しい課題となる[1]。したがって，児童館が，現在どのように活用されているのかその実態を明らかにし，今後どのように活用していくことができるのかその方向性を検討することが必要である。

一方，2003年に「地方自治法の一部を改正する法律」が施行され，公の施設の管理に関する指定管理者制度が創設された。児童館・児童センターにおいても指定管理者制度が導入された。指定管理者制度への移行により，民間活力を有効に活用するという方向性がみられる。芝野[2]は，社会福祉基礎構造改革による民間活力の導入を進めていくためには，社会福祉専門職が提供するサービスの内容を明確にし，利用者の納得と信頼を得ることが必要であり，そのためには，サービス内容の詳細な記述，利用者の満足度，運営状況と運営にかかる費用等を総合的に評価し，わかりやすく説明しなければならないと指摘している。社会福祉の説明責任が問われているといえる。児童館実践についても，一般社会・納税者に対する説明責任が求められている。したがって，児童館の子育て支援実践の効果を実証的に評価し，質の高い実践（証拠に基づいた実践，以下，EBP）を積み上げていくことが必要になってきている。

児童館の利用に関する調査研究は，全国規模では，厚生労働省大臣官房統計情報部が発表した「平成13年地域児童福祉事業等調査の概況－放課後児童クラブ・児童館－」[3]がある。地域別の実態調査や事例研究も行われている。しかし児童館の利用状況をふまえた児童館活動の評価に関する研究は少ない。児童館第三者評価研究会[4]は，児童館機能を地域社会に活かしていくための第三者評価票を作成し，プレテストを実施して児童館版ガイドラインの検証・修正を行っている[5]。児童館の子どもの育成機能については，筆者らが行った調査[6]により，児童館を利用する子どもは遊び友達が多く，また児童館を利用することによって遊び友達が多くなるが，友達の多い子どもほど社会性が高いことから，子ども仲間集団を育成するために児童館の果たす役割が重要であることが明らかになった。西村[7]は，児童館で活動する小・中学生の健全育成の実態を把握し，今後の相談事業の課題として，児童館職員のコーディネートの役割の重要性を指摘している。芝野[8]は，M-D＆Dの手順にしたがって，児童館のグループ・ペアレント・トレーニング実践モデルの開発を試み，1989年以降その成果を報告しているが，今後の課題として，地域の児童館でできるプログラム創りのための研究開発マニュアルを作成することが必要であると指摘している。

以上のように，地域福祉計画を策定し推進するためには，児童館の利用実態を明らかにすることが必要であり，指定管理者制度の導入が進められているので，児童館活動効果の評価を検討することが重要になってくる。そこで，本研究では，児童館機能のなかでも，特に子育て支援機能について着目し，児童館の子育て支援の実態とその活動効果を明らかにすることを目的とした。児童館における子育て支援活動は地域によって異なるので，隣接した地方都市Ａ市とＢ市，児童館活動を積極的に実施しているＣ市の児童館の子育て支援活動を比較検討する。また，児童館の子育て支援活動は，児童館を利用する母親の子育て不安・ストレスを軽減することが期待される。そこで，子育て不安・ストレスと児童館活動効果との関連性についても検討を行った。

Ⅱ 研 究 方 法

（１） 調査の対象・方法・内容

平成18年２月にＡ市，Ｂ市，Ｃ市の児童館の子育て支援活動に参加している保護者(母親)を対象に自記式調査用紙を配布し，留置き調査を行った。配布数1,335,回収数733,回収率54.9%,有効回答数627，有効回答率85.5%であった。

調査内容は，対象者の属性（12項目），子育て状況（７項目），子育て観（３項目），子育て不安やストレス（31項目），児童館利用状況（15項目），児童館活動効果に関する項目（27項目）であった。調査の趣旨は文書で説明し，データの取り扱い等の倫理的配慮を行った。

なお，平成17年国勢調査結果によると，人口はＡ市674,605人，Ｂ市469,372人，Ｃ市は1,474,764人である。Ａ市とＢ市は隣接しており，いずれも中核市で，Ｃ市は政令指定都市である。Ａ市には18の児童館と４の児童センター，Ｂ市には５の児童館と１の児童センター，Ｃ市には108の児童館がある。

（２） 分析方法

SPSS for WINDOWS Ver.14 を使用し，すべての項目について基礎集計を行った。

子育て不安と児童館活動効果の項目を検討するために，Mplus(VERSION 4.1)によるカテゴリカル因子分析(プロマックス回転)を行った。子育て不安・ストレス・児童館活動項目を検討するために，GAPLE 1. EXE による因子ごとの段階反応モデルによる母数値の推定を行った。項目母数を推定し，項目特性曲線(IRCCC)を描くことによって，尺度として使用できる項目を検討した。使用できる項目の被験者母数の推定を行った。

属性，子育て状況，児童館利用状況に関する項目について地域とのクロス集計を行い，χ^2検定を行った。

子育て不安，ストレス，児童館活動効果について得点化を行い，子育て不安得点，ストレス得点，児童館活動効果得点（平均得点，各因子得点）と属性・子育てサポート・子育て観・児童館利用状況との関連をみるために，一元配置分散分析を行った。

子育て不安・ストレス得点と児童館活動効果得点（全市と３市）の関連をみるために，相関係数を算出した。

子育て不安得点・児童館活動効果得点に影響を与える要因を明らかにするために，ステップワイズ法による重回帰分析を行った。

表１ 児童館活動効果のカテゴリカル因子分析

	第１因子	第２因子	第３因子	第４因子
	子どもとの関わり	地域との関わり	自分自身への効果	子どもへの効果
15. 子どもと一緒に遊ぶ	0.843	−0.017	−0.125	−0.007
14. しばしば子どもに話しかける	0.766	0.074	−0.021	0.021
16. ゆとりをもって子育てができる	0.585	0.046	0.050	0.082
13. 子どもとの関わり方・遊び方がわかる	0.527	−0.025	0.311	0.158
９. 楽しい時間を過ごすことができる	0.520	−0.027	0.414	0.130
20. 地域の人に自分から声をかける	−0.006	0.931	−0.011	−0.012
18. 地域の人が自分に声をかけてくれる	0.016	0.930	0.012	−0.036
17. 地域の人が子どもに声をかけてくれる	0.028	0.876	−0.043	0.038
19. 地域の子どもに自分から声をかける	0.009	0.840	−0.002	0.012
21. 地域でのつきあいが活発になる	−0.002	0.807	0.138	−0.014
８. 楽しい子育て仲間・友人ができる	0.022	0.014	0.897	−0.040
11. 困った時などに相談できる	0.079	−0.027	0.828	−0.024
10. 子育てについての知識や情報が増える	0.131	0.038	0.735	0.003
12. 子育てストレスが解消される	0.433	−0.045	0.591	−0.048
３. 子どもの友達が増える	−0.338	0.018	0.560	0.528
５. いろいろな遊びをおぼえる（子ども）	0.199	−0.056	−0.051	0.800
２. 家で体験できないことができる(子ども)	0.217	−0.031	−0.062	0.643
６. 自分のことは自分でする（子ども）	−0.084	0.125	−0.135	0.618
４. 楽しい時間を過ごせる（子ども）	0.264	0.007	0.073	0.615
１. 子ども同士で遊ぶ	−0.258	−0.033	0.372	0.695
７. 絵を描いたり歌などを歌う（子ども）	0.124	0.005	−0.122	0.585
寄与率	38.68	14.24	9.81	8.57
累積寄与率	38.14	52.92	62.73	71.30

注 1) Mplus VERSION 4.1 によるカテゴリカル因子分析，プロマックス回転を行った。
2) □は，因子分析によって明らかになった因子のかたまりを示す。

Ⅲ 研 究 結 果

（１） 調査対象

Ａ市264人（42.1%），Ｂ市262人（41.8%），Ｃ市101人（16.1%），合計627人の母親を対象とした。母親の平均年齢は

33.6歳，夫の平均年齢は35.4歳，児童館に一緒に行く子どもは合計911人で平均年齢は2.7歳であった。家族の平均人数4.1人で，核家族が79.4％，三世代家族が15.9％を占めていた。居住年数は５～10年未満が29.5％，３～５年未満が26.3％であり，居住形態は一戸建て住宅が59.0％，集合住宅が40.8％であった。母親の就労形態は専業主婦が83.6％を占めており，最終学歴は短大卒が32.7％，４年制大学卒が27.6％であった。

表２　地域別にみた母親の属性

	人数（人）	全体（％）	A市（％）	B市（％）	C市（％）	有意確率	p	備考
家族形態	605	82.3	83.9	77.3	90.9	0.005	＊＊	核家族の比率
居住年数	626	39.2	31.9	49.3	32.0	0.003	＊＊	５年以上の居住年数の比率
居住形態	626	59.1	51.5	69.1	53.0	0.001	＊＊＊	一戸建て住宅の比率
母親の就労形態	601	87.2	90.3	82.8	90.8	0.013	＊	専業主婦の比率
母親の最終学歴	618	27.3	27.4	24.7	34.0	0.127		４年制大学卒の比率

注　＊＊＊：p＜0.001，＊＊：p＜0.01，＊：p＜0.05

表３　地域別にみた子育て状況

	人数（人）	全体（％）	A市（％）	B市（％）	C市（％）	有意確率	p
子育てサポート[2]							
近所とのつきあい	626	24.8	23.9	26.4	22.8	0.071	
友人とのつきあい	621	48.0	45.0	47.5	57.0	0.258	
夫との子育て話し合い	616	61.7	62.6	56.8	72.0	0.121	
夫の子育て参加	617	58.8	59.5	56.6	63.0	0.603	
夫の精神的支え	621	50.7	51.7	46.2	60.0	0.372	
相談相手[3]							
夫	627	85.0	84.1	84.4	89.1	0.450	
自分の父母	627	73.2	76.9	66.8	80.2	0.007	＊＊
配偶者の父母	627	28.4	29.9	27.1	27.7	0.762	
自分のきょうだい	627	34.1	35.2	32.4	35.6	0.750	
配偶者のきょうだい	627	7.0	5.7	8.4	6.9	0.450	
近所の人や知人	627	31.7	31.8	30.2	35.6	0.602	
友人	627	77.4	78.4	74.0	83.2	0.153	
保健所・児相など専門機関	627	11.3	11.4	11.5	10.9	0.988	
かかりつけの医師	627	9.9	8.0	7.6	20.8	0.000	＊＊＊
保育園・幼稚園の先生	627	17.4	15.2	19.1	18.8	0.452	
いない	627	0.3	0.4	0.4	0.0	0.825	
情報源[3]							
夫	627	19.1	16.7	20.2	22.8	0.349	
自分の父母	627	57.9	65.2	48.9	62.4	0.000	＊＊＊
配偶者の父母	627	25.7	29.2	22.5	24.8	0.210	
自分のきょうだい	627	27.8	29.2	25.6	29.7	0.584	
配偶者のきょうだい	627	8.6	7.6	10.7	5.9	0.256	
近所の人や知人	627	38.8	41.3	35.5	40.6	0.362	
友人	627	75.8	75.4	73.7	82.2	0.233	
保健所・児相など専門機関	627	25.8	25.0	23.7	33.7	0.137	
かかりつけの医師	627	14.2	16.3	12.2	13.9	0.406	
保育園・幼稚園の先生	627	27.1	20.8	34.4	29.7	0.009	＊＊
雑誌・本	627	62.2	68.2	56.9	60.4	0.026	＊
テレビ・ラジオ	627	34.1	34.5	35.9	28.7	0.430	
インターネット	627	21.7	23.5	16.8	29.7	0.018	＊
子育て観[4]							
三歳児神話	624	28.2	25.1	33.5	22.8	0.056	
性別役割分業	626	3.4	2.7	3.4	5.0	0.198	
夫婦協働	620	72.3	73.9	69.1	76.0	0.309	
児童館以外の子育てサークル[3]							
親子クラブ	627	35.7	40.9	38.5	14.9	0.000	＊＊＊
母親クラブ	627	8.6	2.7	15.6	5.9	0.000	＊＊＊
子育て広場	627	27.1	20.8	30.5	34.7	0.008	＊＊
子ども会	627	11.8	9.8	15.6	6.9	0.030	＊
子ども劇場	627	1.4	1.9	1.5	0.0	0.391	
保育所の子育てサークル	627	15.6	18.6	13.0	14.9	0.206	
つどいの広場	627	2.9	1.1	3.8	5.0	0.072	
参加していない	627	26.8	27.7	22.9	34.7	0.071	

注　1)　＊＊＊：p＜0.001，＊＊：p＜0.01，＊：p＜0.05
2)　「よくある」と答えた比率
3)　「はい」と答えた比率
4)　「非常に同感する」と答えた比率

（２）　カテゴリカル因子分析

子育て不安・ストレス・児童館活動効果に関する項目に欠損値のある対象を除いた627人を対象に，子育て不安に関する24項目のカテゴリカル分析を行った。項目21と項目23の因子負荷量が0.3未満となったので，これを除く22項目について，因子分析を行った結果，１因子を抽出した。これを「子育て不安」とした。

児童館活動効果に関する27項目中，欠損値の多い「子どもの父親」に関する５項目と，「自分自身」に関する１項目を除く21項目についてカテゴリカル因子分析を行った結果，表１に示すように４因子を抽出した。

（３）　項目母数・被験者母数の推定

項目反応理論によると，識別力は「尺度値の変化によってどれだけ反応確率が変化するか」を表現する指標であり，識別力が高いほどその項目は尺度値の変化を敏感に検出することができる[9]。困難度は「ある項目のあるカテゴリに反応する確率が0.5になるときの尺度値」であり，困難度が高い項目は難しい項目であり，反対に困難度の低い項目はやさしい項目であり，ある程度ばらついているほうがよい[10]。

子育て不安に関する22項目についてGAPLE 1. EXEによる母数値の推定を行った結果，項目18，項目20，項目８，項目21の４つの項目については識別力が低く，項目特性曲線も広がっていたので除くこととした。ストレスに関する７項目についても同様に項目母数の推定を行った結果，項目31の識別力が低かったので除いた。児童館活動効果については，４因子ごとに母数値の推定を行った。なお，第１因子，第３因子，第４因子は，「全くない」と答えた人が少なかったので，「あまりない」に含むこととし，４段階評価を３段階評価に変えた。項目特性曲線を描いた結果，すべての項目を使用することとした。

これらの結果から，子育て不安(18項目)，ストレス(６項目)，児童館活動効果(18項目)の第１因子(５項目)，第２因子(４項目)，第３因子(５項目)，第４因子(６項目)と全項目の平均について被験者母数を推定した。

(４) 地域別からみた母親の属性・子育て状況・児童館利用状況

表２に示したように，Ｃ市の核家族や専業主婦の比率が高くなっていた。５年以上の居住年数や一戸建て住宅の比率はＢ市が高くなっていた。

子育て状況については，表３に示したように，相談相手としては，夫・友人・自分の父母をあげる母親が多いが，Ｃ市は自分の父母やかかりつけの医師と答えた母親が多くなっていた。情報源としては，友人をあげる母親が多いが，Ａ市については自分の父母や雑誌・本，

表４　地域別にみた児童館利用状況

	人数(人)	全体(%)	A市(%)	B市(%)	C市(%)	有意確率	p
児童館参加のきっかけ[2]							
子どもが参加	627	12.0	7.6	18.7	5.9	0.000	＊＊＊
近所の人に誘われた	627	18.2	20.5	15.3	19.8	0.274	
児童館に行っている人に誘われた	627	32.1	30.7	31.7	36.6	0.544	
保健所の紹介	627	5.9	6.8	3.8	8.9	0.129	
小学校のPTA	627	0.3	0.4	0.4	0.0	0.825	
母親クラブの会報	627	7.0	9.5	6.5	2.0	0.039	＊
児童館だより	627	22.2	25.4	17.2	26.7	0.037	＊
市の広報	627	18.0	11.4	28.6	7.9	0.000	＊＊＊
児童館参加理由[2]							
自分の友達の増加	627	43.4	44.7	33.2	66.3	0.000	＊＊＊
子どもの友達の増加	627	59.3	61.4	54.2	67.3	0.050	＊
育児の情報交換	627	38.0	38.3	30.2	57.4	0.000	＊＊＊
子どもの遊ばせ方を知りたい	627	14.8	14.8	12.6	20.8	0.144	
子どもを遊ばせたい	627	87.2	87.1	87.0	88.1	0.959	
楽しい時間を過ごしたい	627	49.6	50.0	46.2	57.4	0.156	
子育て相談	627	10.5	8.7	8.0	21.8	0.000	＊＊＊
児童館参加頻度[2]							
週２～３回以上	34	5.5	4.9	5.1	8.1		
週１～２回程度	316	51.2	68.4	31.4	56.6		
２週間に１回程度	185	30.0	19.0	41.6	29.3	0.000	＊＊＊
１月に１回程度	55	8.9	6.1	13.3	5.1		
２月１回以下	27	4.4	1.5	8.6	1.0		
児童館来館方法[2]							
徒歩	627	12.8	9.5	6.5	37.6	0.000	＊＊＊
自転車	627	22.6	18.9	14.9	52.5	0.000	＊＊＊
公共の乗り物	627	1.1	1.5	0.0	3.0	0.039	＊
自家用車	627	66.3	73.5	80.5	10.9	0.000	＊＊＊
児童館のクラブ参加の有無[2]	625	64.6	71.5	52.1	79.2	0.000	＊＊＊
児童館で子育てについて話し合う							
よくある	182	29.1	30.0	21.5	46.5		
時々ある	306	49.0	50.2	49.8	43.6		
ほんどない	97	15.5	12.2	21.8	7.9	0.000	＊＊＊
全くない	40	6.4	7.6	6.9	2.0		
児童館に親しい友人がいる							
たくさんいる	84	13.4	11.0	12.6	21.8	0.000	＊＊＊
少しいる	354	56.5	59.5	48.9	68.3		
あまりいない	115	18.3	17.4	23.7	6.9	0.000	＊＊＊
いない	74	11.8	12.1	14.9	3.0		
児童館に父親が参加することがある							
よく参加する	2	0.3	0.0	0.8	0.0		
時々参加する	57	9.1	7.2	11.1	8.9		
あまり参加しない	81	12.9	11.7	11.5	19.8	0.110	
全く参加しない	486	77.6	81.1	76.6	71.3		
児童館職員に相談することがある							
よくある	16	2.6	2.3	2.7	3.0		
時々ある	143	22.9	26.2	18.5	25.7		
ほとんどない	238	38.1	35.0	38.8	44.6	0.154	
全くない	227	36.4	36.5	40.0	26.7		
児童館施設・設備利用しやすい							
よく整備されている	162	26.0	24.7	23.5	35.6		
だいたい整備されている	406	65.1	67.7	66.2	55.4	0.120	
あまり整備されていない	56	9.0	7.6	10.4	8.9		
児童館で安心して子どもを遊ばせる							
とても安心	242	38.6	36.7	37.0	47.5		
だいたい安心	364	58.1	60.6	57.6	52.5	0.037	＊
やや安心	21	3.3	2.7	5.3	0.0		
児童館活動に満足している							
とても満足	239	38.4	41.4	31.0	49.5		
だいたい満足	359	57.7	54.8	64.0	49.5	0.007	＊＊
やや不満	24	3.9	3.8	5.0	1.0		
児童館活動に対する負担･不満[2]							
活動準備	627	3.0	3.4	2.7	3.0	0.885	
行事参加	627	1.3	0.0	2.3	2.0	0.051	
友達ができない	627	5.6	6.4	5.7	3.0	0.431	
時間帯・曜日が合わない	627	10.0	10.2	11.8	5.0	0.147	
父親が参加できない	627	4.8	5.3	3.1	7.9	0.131	
特に不満はない	627	66.3	65.5	64.9	72.3	0.383	

注　1)　＊＊＊：p＜0.001，＊＊：p＜0.01，＊：p＜0.05
　　2)　「はい」と答えた人の比率

Ｂ市は保育園・幼稚園の先生，Ｃ市はインターネットと答えた母親が多かった。児童館以外の子育てサークルについては，親子クラブと答えた母親はＡ市，母親クラブや子ども会と答えた母親はＢ市，子育て広場と答えた母親はＣ市が多くなっていた。

表４に示したように児童館参加のきっかけは，児童館に行っている人に誘われたと答えている母親が32.1%と多くなっていた。Ｂ市については子どもが参加していることや市の広報をあげている母親が他市に比べて多かった。児童館参加理由は，子どもを遊ばせたいと答えている母親が87.2%と高くなっていた。Ｃ市については自分や子ども友達の増加，情報交換，子育て相談と答えている母親の割合が他市に比べて高くなっていた。児童館参加頻度は，週１～２回程度と答えた割合が51.2%と高くなっていたが，Ｂ市については２週間に１回程度と答えた割合が他市と比べて多く，利用回数が少なくなっていた。児童館来館方法には地域差がみられ，Ａ市やＢ市は自家用車が多くなっていたが，Ｃ市は自転車や徒歩が多くなっていた。児童館のクラブの参加については，Ｂ市の母親の参加が他市に比べ少なくなっていた。児童館で子育てについて話し合う，児童館に親しい友人がいる，児童館で安心して子どもを遊ばせるなどの項目についてはＣ市の母親が高く評価しており，満足度も高くなっていた。

（５） 地域別にみた児童館活動効果と子育て不安・ストレス

表５に示したように，児童館活動効果の平均得点・第１因子得点「子どもとの関わり」・第３因子得点「自分自身への効果」については，Ｃ市が高く，Ｂ市が低くなっていた。しかし，子育て不安得点については，逆にＢ市が高く，Ｃ市が低くなっていた。

（６） 児童館活動効果・子育て不安・ストレスと属性・子育てサポート・子育て観・児童館利用状況との関連

表６に示したように，児童館活動効果第２因子得点「地域との関わり」については，核家族が三世代家族より低く，集合住宅，１年未満の居住年数，在宅勤務や専業主婦の方が低くなっていた。第１因子得点「子どもとの関わり」については，集合住宅より一戸建て住宅に住む母親の方が低くなっていた。

児童館活動効果に関するほとんどの得点については，子育てサポートのある母親ほど得点が高くなっていた。子育て不安得点については，子育てサポート（近所づきあいは除く）のある母親ほど低くなった。

三歳児神話の考え方に同感する母親については，児童館活動効果平均得点，第３因子得点「自分自身への効果」，第４因子得点「子どもへの効果」が高くなっていた。

表５　地域別にみた子育て不安得点と児童館活動効果得点（一元配置分散分析）

	人数（人）	平均値	標準偏差	自由度	Ｆ値	有意確率	多重比較
児童館活動効果							
平均得点	627	0.002	0.675				
Ａ市の児童館	264	0.029	0.675	2	6.537	0.002	Ｂ市＜Ｃ市
Ｂ市の児童館	262	−0.095	0.659				
Ｃ市の児童館	101	0.180	0.677				
第１因子得点	627	0.002	0.891				
Ａ市の児童館	264	0.126	0.873	2	12.727	0.000	Ｂ市＜Ａ市･Ｃ市
Ｂ市の児童館	262	−0.204	0.859				
Ｃ市の児童館	101	0.210	0.919				
第２因子得点	627	0.003	1.035				
Ａ市の児童館	264	−0.061	1.051	2	1.115	0.329	
Ｂ市の児童館	262	0.073	0.980				
Ｃ市の児童館	101	−0.016	1.130				
第３因子得点	627	0.002	0.947				
Ａ市の児童館	264	0.004	0.959	2	14.713	0.000	Ｂ市･Ａ市＜Ｃ市
Ｂ市の児童館	262	−0.164	0.907				
Ｃ市の児童館	101	0.425	0.893				
第４因子得点	627	0.002	0.863				
Ａ市の児童館	264	0.048	0.837	2	2.345	0.097	
Ｂ市の児童館	262	−0.084	0.908				
Ｃ市の児童館	101	0.102	0.801				
子育て不安得点	627	−0.008	1.014				
Ａ市の児童館	264	−0.093	0.940	2	4.898	0.008	Ｃ市･Ａ市＜Ｂ市
Ｂ市の児童館	262	0.138	1.079				
Ｃ市の児童館	101	−0.165	0.986				
ストレス得点	627	−0.002	0.956				
Ａ市の児童館	264	−0.028	0.961	2	0.208	0.812	
Ｂ市の児童館	262	0.025	1.001				
Ｃ市の児童館	101	−0.006	0.821				

表６　児童館活動効果得点・子育て不安得点・ストレス得点と属性・子育てサポート・子育て観・児童館利用状況の関連（一元配置分散分析）

	児童館活動効果					子育て不安得点	ストレス平均得点	多重比較
	平均得点	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子			
属性								
①家族形態			＊＊					三世代家族＞核家族
②居住年数			＊					１年未満が低い
③居住形態		＊＊＊	＊＊＊					第１因子：集合住宅>一戸建て住宅，第２因子：一戸建て住宅>集合住宅
④就労形態			＊					在宅勤務や専業主婦が低い
⑤最終学歴								
子育てサポート								
①近所づきあい	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊			平均・第１因子・第３因子・第４因子：１＞２＞３・４，第２因子：１＞２＞３
②友人つきあい	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊		平均・第３因子：１＞２＞３>，第１因子：１＞２，第２・４因子：１＞２・３，不安：３＞２・１
③夫との話し合い	＊＊＊	＊＊＊	＊＊	＊＊＊	＊＊	＊＊＊		平均：１＞２＞３，第１・２・３・４　因子：１＞２・３，不安：３＞２＞１
④夫の子育て参加	＊＊	＊	＊＊	＊＊		＊		平均・第２因子・第３因子：１・２＞３
⑤夫の精神的支え	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊		＊＊＊		平均：１＞２・３・４，２＞４，第１・２　因子：1>２・４，第３因子：１＞３・４，2>４，不安：２＞１
子育て観								
①三歳児神話	＊			＊	＊			平均・第３因子・第４因子：１＞３
②性別役割分業								
③夫婦協働								
児童館利用状況								
①話し合う	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊		平均・第３因子：１＞２＞３・４，第１因子：１＞２・３・４，第２因子：１・２＞３・４，第４因子：１＞２＞３>，１＞４，不安：３＞１
②親しい友人	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊		平均・第３因子・第４因子：１＞２＞３・４，第１因子：１＞２＞３，１＞４，第２因子：１・２＞３・４，不安：３・４＞１
③父親参加								
④職員に子育て相談	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊			平均：１＞２＞３＞４，第１因子：１・２＞３・４，第２因子：１＞３・４，２＞４，第３・４因子：１・２＞３＞４
⑤施設・設備整備	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊			平均・第１因子・第３因子・第４因子：１＞２・３，第２因子：１＞３
⑥安心して遊ばせる	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊	＊		平均・第２因子・第４因子：１＞２＞３，第１因子・第３因子：１＞２・３，不安：２＞１
⑦満足度	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊＊＊	＊	＊		平均・第１因子・第２因子・第３因子・第４因子：１＞２＞３，不安：３＞１

注　1)　＊＊＊：ｐ＜0.001，＊＊：ｐ＜0.01，＊：ｐ＜0.05
2)　子育てサポート①・②・③・④の多重比較⇒１：よくある，２：時々ある，３：ほとんどない，４：全くない
3)　子育てサポート⑤の多重比較⇒１：よく思う，２：時々思う，３：ほとんど思わない
4)　子育て観①の多重比較⇒１：非常に同感する，２：だいたい同感する，３：あまり同感しない，４：全く同感しない
5)　児童館利用状況①・④の多重比較⇒１：よくある，２：時々ある，３：ほとんどない
6)　児童館利用状況②の多重比較⇒１：たくさんいる，２：少しいる，３：あまりいない，４：いない
7)　児童館利用状況⑤の多重比較⇒１：よく整備されている，２：だいたい整備されている，３：あまり整備されていない
8)　児童館利用状況⑥の多重比較⇒１：とても安心，２：だいたい安心，３：やや安心
9)　児童館利用状況⑦の多重比較⇒１：とても満足，２：だいたい満足，３：やや不満

父親参加に関する項目を除くすべての児童館利用状況に関する項目について高く評価していた母親は，児童館活動効果得点も高くなっていた。児童館で子育てについて話し合う，児童館に親しい友人がいる，安心して遊ばせる，満足度の項目について高く評価をしていた母親の子育て不安得点は低くなっていた。

（７）　子育て不安や児童館活動効果に影響を与える要因

表７に示したように，全市を対象とした母親の子育て不安得点と，児童館活動効果平均得点および４つの因子得点の間には，いずれも１％の有意な負の相関が認められた。したがって，母親が児童館に参加して良かったと評価していることと，母親の子育て不安が低いことには関連性があることが明らかになった。しかし，児童館活動効果第１因子得点の相関係数以外は，

表７　児童館活動効果と子育て不安・ストレス得点との相関

	子育て不安得点	ストレス得点
児童館活動効果		
平均得点		
全市	-0.267＊＊	-0.062
Ａ市	-0.285＊＊	-0.197＊＊
Ｂ市	-0.250＊＊	0.076
Ｃ市	-0.196＊	-0.064
第１因子得点		
全市	-0.306＊＊	-0.068
Ａ市	-0.320＊＊	-0.163＊＊
Ｂ市	-0.301＊＊	0.020
Ｃ市	-0.195	-0.035
第２因子得点		
全市	-0.168＊＊	-0.047
Ａ市	-0.221＊＊	-0.116
Ｂ市	-0.130＊	0.027
Ｃ市	-0.195	-0.068
第３因子得点		
全市	-0.165＊＊	-0.033
Ａ市	-0.158＊	-0.124＊
Ｂ市	-0.152＊	0.071
Ｃ市	-0.112	-0.054
第４因子得点		
全市	-0.135＊＊	-0.031
Ａ市	-0.129＊	-0.179＊＊
Ｂ市	-0.149＊	0.102
Ｃ市	-0.039	-0.019

注　＊＊：ｐ＜0.01，＊：＜0.05

相関係数が0.3未満であり，必ずしも高い相関があるとはいえなかった。地域別にみると，Ａ市とＢ市については同様に子育て不安得点と児童館活動効果得点との間に有意な負の関連性が認められた。しかし，Ｃ市については，子育て不安得点と児童館活動効果平均得点との間には有意な負の相関が認められたが，４つの因子との間には有意な相関はなく，Ａ市やＢ市ほど子育て不安と児童館活動効果の関連性は明らかではなかった。

また，表８に示したように，子育て不安得点に影響を与える要因は，児童館活動効果平均得点，夫との子育て話し合い，子どもの人数，ストレス得点，友人とのつきあいであった。

児童館活動効果に影響を与える要因は，表９に示したように，児童館で子育てについて話し合う，児童館で安心して子どもを遊ばすことができる，児童館に親しい友人がいる，児童館職員に心配ごとを相談できる，児童館の施設・設備が利用しやすいように整備されていることであった。

表８　子育て不安得点の重回帰分析

	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
（定数）	−1.002	0.180		−5.553	0.000		
児童館活動効果(平均)	−0.272	0.062	−0.183	−4.405	0.000	0.880	1.136
夫との子育て話し合い	0.343	0.072	0.190	4.730	0.000	0.941	1.063
子ども人数	0.160	0.055	0.113	2.891	0.004	0.998	1.002
ストレス得点	0.104	0.041	0.099	2.527	0.012	0.994	1.006
友人とのつきあい	0.136	0.069	0.081	1.985	0.048	0.916	1.092

注　1)　$R=0.358$，$R^2=0.128$
2)　従属変数：子育て不安得点
3)　除去された独立変数：自分の年齢，子どもの年齢，家族の人数，近所とのつきあい，夫の子育て参加，夫の精神的支え，児童館利用合計月数
4)　近所とのつきあい・友人とのつきあい・夫との子育ての話し合い・夫の子育て参加・夫の精神的支え⇒よくある：１点，時々ある：２点，ほとんどない：３点，全くない：４点

表９　児童館活動効果得点の重回帰分析

	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
（定数）	1.753	0.115		15.284	0.000		
子育ての話し合い	−0.207	0.036	−0.257	−5.738	0.000	0.552	1.811
児童館安心	−0.261	0.049	−0.207	−5.374	0.000	0.746	1.341
親しい友人	−0.162	0.036	−0.202	−4.545	0.000	0.563	1.777
心配ごと相談	−0.119	0.030	−0.146	−4.016	0.000	0.841	1.189
児童館整備	−0.091	0.046	−0.075	−1.979	0.048	0.766	1.306

注　1)　$R=0.592$，$R^2=0.350$
2)　従属変数：児童館活動効果平均得点
3)　除去された独立変数：自分の年齢，児童館利用合計月数，クラブ・サークル登録有無，父親参加
4)　児童館のクラブ・サークル参加⇒ある：１点，ない：０点
5)　児童館で子育てについての話し合い・児童館への父親参加・職員への子育て相談⇒よくある：１点，時々ある：２点，ほとんどない：３点，全くない：４点
6)　児童館での親しい友人⇒たくさんいる：１点，少しいる：２点，あまりいない：３点，いない：４点
7)　児童館整備⇒よく整備されている：１点，だいたい整備されている：２点，あまり整備されていない：３点，全く整備されていない：４点
8)　子どもを遊ばす安心度⇒とても安心：１点，だいたい安心：２点，やや安心：３点，とても不安：４点

Ⅳ 考　　察

（１）　児童館活動効果と子育て不安の尺度

今回使用した児童館活動効果や子育て不安に関する項目は順序尺度である。従来，５段階評価や７段階評価を行うことによって順序尺度を間隔尺度として扱うリッカード尺度が用いられている。本研究では４段階評価を用いて児童館活動効果や子育て不安・ストレスを測定した。その結果，児童館活動効果については，第２因子以外の因子については「全くない」という回答が少なく，実際には３段階評価になったので，これらの因子の項目をリッカード尺度として扱うことは不適切であると判断した。そこで，項目反応理論を用いて項目の検討を試みた。

項目反応理論を用いたテストとしてはTOEFLが有名であるが，社会心理学の分野では項目反応理論を用いた尺度の検討が行われている[11]。しかし，社会福祉分野においては項目反応理論による尺度開発は行われていない。項目反応理論は，被験者の特性値の母数を使わずに項目を標準化しているので，無作為抽出の縛りから解放される[12]。また，項目反応理論を導入することによって，個人の特性の変化を継続的に測定することができる[13]。

児童館の子育て支援実践の効果を実証的に評価し，EBPを積み上げていくためにも，項目反応理論による尺度を開発することが必要である。

（２） 地域差について

平成13年４月から９月の時点で，全国に児童館は4,577館あるが，624館と最も多い東京都から29館と最も少ない大分県と設置数は大きな開きがある[3]。先にも述べたように本調査地域にも設置数に違いがみられる。Ａ市とＢ市は隣接した中核市であるにも関わらず，子育て状況や児童館利用状況に違いが認められた。子育て状況については，Ｃ市の母親は，相談相手として友人やかかりつけ医師をあげていることから，子育て状況が他市に比べて良好だと推察される。一方，Ｂ市の子育て状況は，他市に比べ子育て状況が必ずしも良好とは言えず，子育て不安得点も他市に比べ高くなっていた。児童館利用状況についても，Ｃ市では自転車や徒歩で来ることのできる身近な場所に児童館があることから利用頻度も多く，参加理由も積極的であり，児童館の評価も高くなっていた。しかし，Ｂ市の児童館利用頻度は他市に比べ低く，自家用車で来る人が多いことから身近な所に児童館があるとはいえず，その結果，Ｂ市の児童館活動に対する評価が低くなったのではないかと思われる。

児童館の思春期児童と赤ちゃんとのふれ合い交流の促進に関する調査研究を行った高野[14]は，先駆的な活動が非常に良い活動であっても，その活動が必ずしもすべて地域にあてはまるものではないことを指摘し，地域ごとの種々の条件によって，実施方法や内容に工夫をもたせることが必要であると報告している。地域の特性を把握し，地域の実情にあった児童館の子育て支援活動を展開していく必要があり，そのためには地域の児童館でできるプログラム創りのための研究開発マニュアルを作成することが必要である[8]。

（３） 子育て不安や児童館活動効果に影響を与える要因

児童館の子育て支援活動が，母親の子育て不安の軽減に影響を与えるかどうか検討するためにその関連性を検討した結果，有意な相関はあったが，高い相関は認められなかった。しかし，Ａ市やＢ市の児童館活動効果の第１因子得点「子どもとの関わり」と子育て不安得点の相関はｒ＝－0.3であり，弱い相関が認められた。また，児童館利用状況と，児童館活動効果得点や子育て不安得点との間に有意差が認められ，児童館利用状況の良い人ほど児童館活動効果が高く，子育て不安も低くなることが明らかになった。以上のことから，母親の子育て不安を軽減するために，児童館の子育て支援活動が何らかの影響を与えていることが推察された。

さらに，子育て不安得点を従属変数とする重回帰分析を行った結果，児童館活動効果平均得点が低く，夫との子育てについての話し合いがなく，子どもの人数が多く，ストレスが高く，友人とのつきあいのない場合，子育て不安得点が高くなる傾向があることがわかった。ただし，重決定係数が低いので，十分予測・説明ができたとは言えない。一方，児童館活動効果得点を従属変数とする重回帰分析を行った結果，児童館において母親たちと子育てについて話し合い，児童館で安心して子どもを遊ばすことができ，児童館に親しい友人がおり，児童館の職員に心配ごとを相談でき，児童館の施設・設備が利用しやすいように整備されていると思っている場合，児童館活動効果が高くなることが明らかになった。筆者ら[15]がＢ市における６つの児童館において行った児童館調査において，児童館利用状況と児童館の満足度に関する重回帰分析を行った結果，同様の結果が見いだされた。児童館における子育て仲間やソーシャルワーカーとしての児童館の役割の重要性と，児童館の施設・設備の充実の必要性を確認することができた。

Ⅴ 結　　語

児童館は，学齢期の子どもの健全育成の役割に加え，乳幼児と親を対象とした地域の子育て支援の役割を果たしてきた。今後は，さらに子育て不安・ストレス等に対応するために，地域の子育て支援の拠点としての役割が重要になってきている。2007年度より子育て中の親子が気軽に利用できる子育て支援の拠点整備を図るために「地域子育て支援拠点事業」が実施される

ことになった。この事業では，「ひろば型」（つどいの広場），「センター型」（地域子育て支援センター）に加え，民営の児童館等を活用した「児童館型」を設け，親子交流，つどいの場を設置し，子育て中の親などの当事者等がスタッフとして参加する取り組みを実施し，地域の児童館の子育て支援活動を充実することになった[16)]。

地域のニーズを把握し，地域の実情にあった児童館の子育て支援活動を展開していく必要がある。そのためには，本研究から明らかになったように，児童館の子育て支援実践の効果を実証的に評価し，EBP を積み上げていくために，子育て支援実践を評価するための適切な尺度を作成し，地域のニーズに応じた子育て支援活動（プログラム）を創りだすための実践モデルを開発し，マニュアルを作成することが必要である。さらに，子育て中の母親の子育て不安やストレスを軽減するためには，児童館の施設・設備を整備し，乳幼児や母親の居場所づくり，仲間づくり，相談に応じるソーシャルワーカーとしての児童館職員の役割の重要性が示唆された。

謝辞

本研究のアンケート調査にご協力いただいた児童館・児童センターの職員と利用者の皆様に心より御礼申し上げます。また，項目反応理論について熱心にご指導くださいました山口大学教育学部の小杉考司講師に感謝いたします。なお，本研究は平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(C)・課題番号17530446）による研究の一部であり，日本社会福祉学会第54回全国大会において報告を行った。

文　　献

1）武川正吾．地域福祉の主流化と地域福祉計画．武川正吾編．地域福祉計画．東京：有斐閣，2005；15-34.
2）芝野松次郎．社会福祉実践モデル開発の理論と実際．東京：有斐閣，2002；12-9.
3）厚生労働省大臣官房統計情報部．平成13年度地域児童福祉事業等調査の概況－放課後児童クラブ・児童館－．厚生労働省ホームページ（http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/jidou/ 01 /index.html）2007.4.28.
4）児童館第三者評価研究会（主任研究者：吉沢英子）．平成16年度児童関連サービス調査研究事業報告書 児童館等の第三者評価についての調査研究．東京：こども未来財団，2005.
5）林幸範（主任研究者）．児童館等の第三者評価に関する評価基準項目の検証に関する調査研究（平成17年度児童関連サービス調査研究等事業報告書）．ｉ－子育てネット（http://www.i-kosodate.net/mirai/reserch/index.html）2007.4.29.
6）八重樫牧子．児童館の利用が子どもの遊びや生活に与える影響．厚生の指標　2005；52(10)：7-14.
7）西村重稀（主任研究者）．児童館における児童相談に関する調査研究事業（平成17年度児童関連サービス調査研究等事業報告書）．ｉ－子育てネット（http://www.i-kosodate.net/mirai/reserch/index.html）2007.4.29.
8）芝野松次郎，上掲書，183.
9）鈴木綾子．抑うつ尺度の構成．豊田秀樹編．項目反応理論〔事例編〕．東京：朝倉書店，2002；52.
10）鈴木綾子，上掲書，52-3.
11）豊田秀樹編．項目反応理論〔事例編〕．東京：朝倉書店，2002.
12）小杉考司．統計小杉ノート：尺度構成法．2005.
13）豊田秀樹．従来の尺度構成を超えて．豊田秀樹編．項目反応理論〔事例編〕．東京：朝倉書店，2002；10-1.
14）高野陽（主任研究者）．地域の児童館等における思春期児童と赤ちゃんとのふれ合い交流の促進に関する調査研究事業（平成17年度児童関連サービス調査研究等事業報告書）．ｉ－子育てネット（http://www.i-kosodate.net/mirai/reserch/index.html）2007.4.29.
15）八重樫牧子．倉敷の児童館利用に関する調査報告書．2006.
16）鈴木雄二．これからの日本と児童館－放課後子どもプランと児童館－．こども未来　2007；(427)；20-1.